

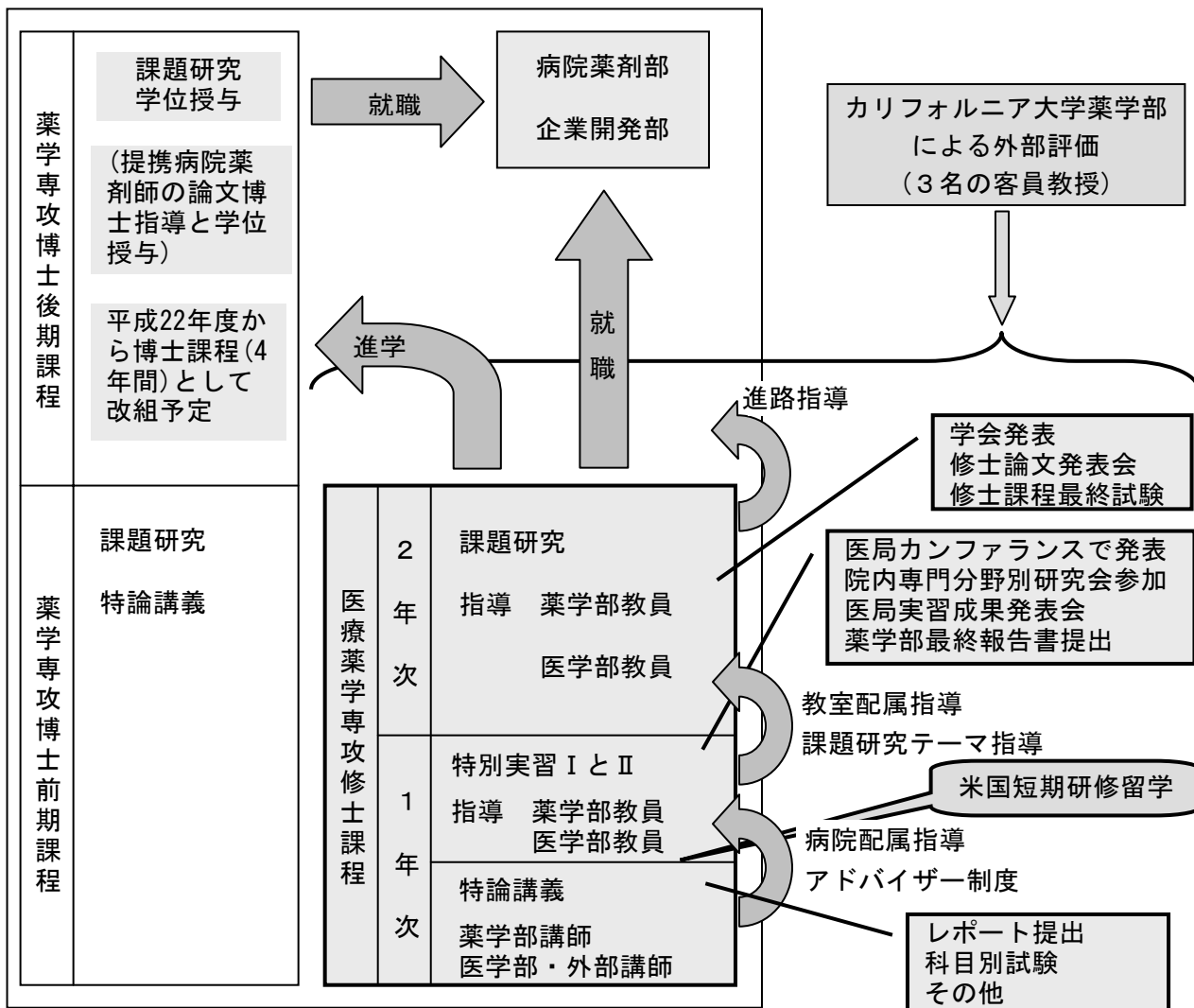
平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 教育プログラム及び審査結果の概要

◇「1.申請分野(系)」～「6.履修プロセスの概念図」:大学からの計画調書(平成17年7月現在)を抜粋

機 関 名	東京薬科大学	整理番号	c019
1. 申請分野(系)	医療系		
2. 教育プログラムの名称	医療薬学教育研究推進事業		
3. 関連研究分野(分科) (細目・キーワード)	主なものを左から順番に記入(3つ以内) 薬学、境界医学		
	主なものを左から順番に記入(5つ以内) (医療系薬学、応用薬理学、病院薬学、薬物治療学、薬効解析学)		
4. 研究科・専攻名 及び研究科長名 <small>([]書きで課程区分を記入、 複数の専攻で申請する場合は、 全ての研究科・専攻を記入)</small>	(主たる研究科・専攻名) 薬学研究科・医療薬学専攻[修士課程]	研究科長(取組代表者)の氏名 林 正弘	
	(その他関連する研究科・専攻名)		
5. 本事業の全体像			
5-(1) 本事業の大学全体としての位置付け(教育研究活動の充実を図るための支援・措置について)			
<p>基礎薬学研究者の数は多いが、臨床薬学研究者の数は臨床医学研究者の数に比べて圧倒的に少ない。薬学部は平成18年度から6年制に移行するが、この傾向は益々強くなると予想される。多くの薬系大学はこれまで通りの4年制学部と修士課程を存続させることによって、基礎薬学研究者の育成を継続しようとしているが、これは薬学部6年制の趣旨に合わないと思われる。臨床薬学技術者と研究者の育成こそ、国家財政的に崩壊しつつある医療制度再生に寄与すると確信できる。そこで本学は他学に先駆けて、臨床薬学技術者と研究者の育成を、6年制薬学部設置の中心に据えることとする。</p> <p>6年制を迎えるに当たっての本学の立場は、6年制薬学部は100%薬剤師教育のためにあり、全学的な位置づけとしては、基礎薬学・基礎医学研究については、本学で新たに改組を計画中である生命科学部に主としてこれを担わせることとなろう。本事業は、現在の医療薬学専攻を6年制薬学部とやがて設置する博士課程へと発展的に改組してゆく道を探ることにある。これらにより、新しい薬学教育の理念を希求し、世界に通用する日本の薬学研究を提示することによって、6年制薬学部の教育研究活動の基盤を構築することである。</p>			

機 関 名	東京薬科大学	整理番号	c019
<p>5-(2) これまでの教育研究活動の状況(現在まで行ってきた教育取組について)</p> <p>1981年に定めた本学大学院医療薬学専攻(以下、「本専攻」という。)設置の目的は、高度化する薬物治療を医師と協力して実践できる薬剤師の育成と、薬物療法の知識をもって医薬開発に従事する薬学技術者の養成の2点である。第1の目的を達成するため、教育研究活動のほとんど全てを医科大学との「医薬提携」によって進めてきた。提携は単に教員間のものではなく、理事長・学長・学部長レベルでの契約に基づく。実習カリキュラムは薬剤部を少なく、診療部を中心に構築した(1:5)。この取組が進学志願者の増加につながった。第2の目的は、課題研究の技術指導を通じて達成するよう努めているが、これにも医科大学との「医薬提携」が有効に寄与している。また、医療においては診療と研究のいずれにおいても倫理規範の遵守が強く求められるが、患者資料や試料の取扱を薬学部で行うための倫理規範について、学内に倫理規程を設けて対応してきた。</p>			
<p>5-(3) 魅力ある大学院教育への取組・計画(大学院教育の実質化(教育の課程の組織的展開の強化)のための具体的な教育取組及び意欲的・独創的な教育プログラムへの発展的展開のための計画について)</p> <p>院生の立場で見たとき、本学医療薬学専攻が医学部との連携強化を基本に取組んできたことは魅力的である。院生は実務実習病院の指導者が医学部教員であることを歓迎し、満足している。何故なら医学部教員は医療チームにおける指導的立場にあると同時に、最終的な責任者だからである。大学院修了後に医療職に就くことを目指している院生にとって、指導医師に認められることは大きなモチベーションとなって現われる。一方、薬剤部内の実習は指導薬剤師によって行われるが、専門職として洗練された技術力は院生の向学心を刺激してくれる。</p> <p>実務実習において薬学部教員(病院担当教員)の役割は2次的である。しかし、履修プロセス概念図に示すように、医療チームに加わった院生が多岐にわたるカリキュラムを無事消化し終えるために、教員はあらゆる方策を講じなければならない。最も効率的な方法として、薬学部教員が修士課程2年次の課題研究指導でイニシアティブを掌握することである。院生の課題研究は医師との共同作業であり、薬学部教員不在で放置すれば薬学的発想の生まれる余地はない。そのような課題研究は真に薬剤師育成にはつながらない。薬学部教員は院生の課題研究のテーマ選びと、研究推進の技術指導で魅力を発揮できる。1年間の研究期間とはいえ院生自身は満足できる研究成果を期待している。その期待に少しでも応えるのが薬学部教員の役目であり、応えられれば、院生の満足度に加えて、医学部教員の薬学信頼度を増すこととなり、そのことが本専攻の1.5年間の病院カリキュラムを円滑に運営する原動力となるのである。単純に言えば、研究成果につながるような事業計画であるならば実務実習への関与を積極的に行おう、という医師の薬学教育モチベーションの引出しである。</p> <p>本専攻の意欲的・独創的プログラムとは、医療チームによる無償の教育プログラムの創造でもある。</p>			

6. 履修プロセスの概念図



医療薬学専攻修士課程は、姉妹校・提携校医学部との連携で運営されている。多数の医学部教員が1年次前期の特論講義、後期の特別実習 I と II の指導に当たっている。1年次院生は前期特論講義を薬学部キャンパスで、後期の特別実習を医学部病院で履修する。こうして薬学と医学の教員が共同して教育に当たっている。特記すべきは、前期特論の全単位を取得しなければ、後期特別実習を履修できない。薬剤師国家試験不合格の場合にも、当然ながら履修不可となる。前期と後期の間は夏期休暇で、米国短期研修制度が定着している。カリフォルニア大学サンフランシスコ校 (UCSF) と南カリフォルニア大学 (ロサンゼルス) (USC) のどちらかを選択できる。若手薬学教員2名がコーディネーターとして同行する。

1年次院生は前期の間は教室に所属しない。そのためアドバイザー教員が日常指導に当たっている。病院配属ガイダンスは実習病院ごとに病院担当教員の役目である。病院担当教員は配属後の指導も担当する。特別実習期間中、病院担当教員は指導医師の割り当て、実習課題の選定、医療チーム内での院生の立場の確保、薬剤部との連携、実習成果の確認と評価、報告書作成、2年次課題研究テーマの相談など、あらゆる指導を行っている。2年次院生が行う課題研究は、薬学部と医学部の共同指導による。課題の決定には苦慮するが、臨床で提起された問題を薬学的に解決する手段を講じるのは薬学部教員の役目である。一方、医学部教員は、院生による臨床サンプル(血液、尿、組織など)の収集、カルテ閲覧などをサポートする。成果は修士論文として薬学部で発表されるが、医学部においても単位認定とは無関係に発表の機会を設けている。

最後に、UCSFの3名の客員教授によって、医療薬学専攻の全般的評価が行われる。

機 関 名	東京薬科大学	整理番号	c019
<p data-bbox="165 199 588 232">< 審査結果の概要及び採択理由 ></p> <p data-bbox="165 295 1428 472">「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成機能の強化を図るため、大学院における意欲的かつ独創的な研究者養成に関する教育取組に対し重点的な支援を行うことにより、大学院教育の実質化（教育の課程の組織的な展開の強化）を推進することを目的としています。</p> <p data-bbox="189 488 491 521">本事業の趣旨に照らし、</p> <p data-bbox="189 533 1428 613">①大学院教育の実質化のための具体的な教育取組の方策が確立又は今後展開されることが期待できるものとなっているか</p> <p data-bbox="189 629 1225 663">②意欲的・独創的な教育プログラムへの発展的展開のための計画となっているか</p> <p data-bbox="165 678 1428 855">の2つの視点に基づき審査を行った結果、当該教育プログラムに係る所見は、大学院教育の実質化のための各項目の方策が、優れており、期待できるとともに、教育プログラムが事業の趣旨に適合しており、その実現性、一定の成果と今後の展開の面も期待できると判断され、採択となりました。なお、特に優れた点、改善を要する点等については、以下の点があげられます。</p> <p data-bbox="177 916 633 949">〔特に優れた点、改善を要する点等〕</p> <ul data-bbox="172 965 1428 1429" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="172 965 1428 1140">・臨床薬剤師の養成に必要なプログラムとして、薬学教育6年制を見据え、現在の医療薬学専攻を6年制薬学部とこれから設置する博士課程へと発展的に改組してゆく道を探ることに目的を置いており、教育プログラムは具体性があり、現在の薬学が直面する問題に真正面から取り組もうとするものである。 <li data-bbox="172 1155 1428 1330">・当該大学は、以前から「医療薬学」を意識した取り組みを行い、今回の計画でも医療現場における薬学人の貢献を見据えた積極的な取り組みを計画しており、「大学院学生の視点」から、どのような教育システムを構築したら学生が「やる気になるか」、どうすれば学生が「満足するか」という面での工夫など、他の計画では、見られない特色がある。 <li data-bbox="172 1346 1428 1429">・なお、6年制完全移行後の展開や、将来の博士課程の教育との関係について、具体的に検討することが必要である。 			